

# インフラガイド

新大橋は、元禄年間に隅田川3番目の橋として、当時、「大橋」と呼ばれていた両国橋に次いで架設されたため、新大橋と名付けられました。

1912年(明治45年)に従来の木橋から、鋼プラットラス橋に架け替えられ、1923年(大正12年)の関東大震災では大きな被害を受けず、避難路として多くの人々の命を救ったため「人助け橋」と呼ばれ親しまれていました。

しかし、地盤沈下の影響や交通量の増大などにより、1977年(昭和52年)に現在の鋼斜張橋に架け替えられました。なお、旧橋の橋げたの一部は博物館明治村(愛知県)で保存されています。

## ★1 新大橋



橋の中央にあるケーブルを支えるための塔には、明治の鉄橋のレリーフが飾られています。



東岸(森下駅寄り)の下流側橋詰には、明治の鉄橋の橋のもとにあった橋灯(街路灯)が移設・保存されています。



## 撮影ポイント① 新大橋

右の写真のような、新大橋の橋名が入った碑(親柱[おやばしら]といいます。)を撮影して下さい。  
橋の四隅にありますので、どれでも構いません。



## ★2 隅田川 テラス

中央区勝どき付近から荒川区の南千住付近まで約12kmの間では、一部迂回する箇所がありますが、川面に沿って「水辺テラス」が整備されています。

## ★3 「旧新大橋跡」 記念碑

江戸時代の新大橋は、現在の位置から下流約400mほどのこの位置付近に架けられていました。架橋当時、この付近に住んでいた俳人、松尾芭蕉が、橋の完成を見て「ありがたやいただいて踏む橋の霜」の句を詠んでいます。

★4  
万年橋

小名木川の隅田川口に江戸時代初期から架かる歴史ある橋で、この橋の北側に小名木川を航行する船を取り締まる番所がありました。  
現在の橋は関東大震災の復興事業により架け替えられた橋で、1930年(昭和5年)に完成し、現在は江東区が管理しています。  
なお、万年橋から見る清洲橋が一番美しく見えると伝えられていて、清洲橋のモデルになったと言われているドイツのライン川に架かるケルンの吊り橋を彷彿させることから、「ケルンの眺め」と呼ばれています。

★5  
新小名木川  
水門

新小名木川水門は、小名木川の隅田川口にある水門で1961年(昭和36年)に完成しました。高潮発生時には閉鎖して防潮堤の役目を果たします。東京都建設局では、このような水門を13基整備・管理し、高潮、洪水など自然災害から都民の生命と財産を守っています。

【新小名木川水門諸元】  
形式: 鋼製単葉ローラーゲート  
径間: 11m×3連  
門扉高さ: 7.8m  
竣工: 昭和36年度



万年橋と新小名木川水門

★6  
清洲橋

関東大震災の復興事業により新たに架けられた橋で、架橋当時の両岸の地名(深川区清住町、日本橋区中州町)を1字ずつ取って名付けられました。  
「清洲橋は永代橋の上流に並行し、その距離近からざるも彼我相望み得べく、永代橋と対照的位置にあるから、永代橋の上向きたる拱(アーチ)型曲線に対して下垂形線を有する吊橋を選定した。」(帝都復興誌)とされ、当初から永代橋と対で検討されていました。  
2007年(平成19年)には都道府県の道路橋としては初めて、勝鬨橋、永代橋とともに国の重要文化財に指定されています。

この清洲橋をはじめ、関東大震災の復興事業などにより隅田川に架けられた橋は歴史的にも貴重な橋であり、次の世代に継承するため長寿命化に取り組んでいます。  
この一環として、大規模地震に備えた補強を実施していますが、清洲橋は国の重要文化財に指定されていることから、外観を変化させることなく補強を行っています。  
今回のコースの清洲橋下のテラスから橋けたを見上げると、この補強で設置したダンパーと呼ばれる地震時の水平力を吸収する装置を見ることができます。



ダンパー

東京都建設局では、水辺の更なる魅力向上と地域の活性化を目的に、隅田川及び日本橋川の一部区間の河川敷地を活用して飲食店等の営業を行う「かわてらす」の社会実験を実施しています。なお、「かわてらす」とは、夏の京都などでよく見られる「川床」の東京版です。

★7  
かわてらす



かわてらす

台風による高潮では大雨を伴うことが多々あります。このような時に水門を閉鎖すると、その地域に降る雨で内部河川の水位が上昇します。排水機場は、この水位上昇を防ぐために、内部河川の水をポンプで外へ排出する施設で、東京都建設局では、この清澄排水機場を含め5箇所整備・管理しています。

今回のコースから見ることができる水門の奥(マップ右側)にポンプ設備がある排水機場本体の建物があります。

また、この近くには、東京都建設局が管理する水門・排水機場を遠隔監視するための「水門管理センター」が設けられています。

★8  
清澄排水機場

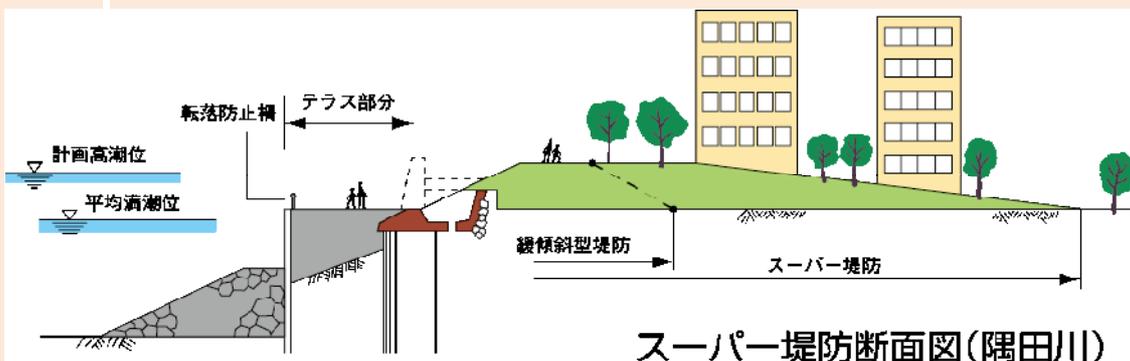


清澄排水機場

東京都建設局では、高潮や大地震による水害から東部低地帯を守るため、1985年(昭和60年)より東部低地帯を流れる主要5河川(隅田川・中川・旧江戸川・新中川・綾瀬川)においてスーパー堤防の整備を進めています。

スーパー堤防は開発者の協力を得て、開発と一体的に整備することが特徴です。コンクリートの防潮堤に代わり、盛土により構成された幅の広いスーパー堤防を整備することにより、地震への安全性が向上し、うるおいのある水辺空間が創出されます。

★9  
スーパー堤防



★10  
防災船着場

1995年(平成7年)の阪神・淡路大震災を契機に災害時における河川舟運の有効性が注目され、災害により寸断された陸上交通網の補完や物資輸送等の道路負担の軽減等について河川に大きな期待が寄せられたことを背景に整備を進めており、今回のマップの範囲(新大橋～勝鬨橋)には、箱崎町(隅田川大橋上流)、新川(中央大橋下流)、明石町(佃大橋と勝鬨橋の間)の3箇所で開催されています。

隅田川では、水上バスや屋形船など船による観光が盛んになっているため、明石町防災船着場を、両国、桜橋、越中島の防災船着場とともに一般の船舶に開放しています。

※隅田川の他に、荒川、新中川、中川、旧江戸川、多摩川、臨海部など、河川や港湾の管理区分により国、東京都(建設局、港湾局)、区が整備を進めています。(民間が整備したものもあります。)



箱崎町の防災船着場

★11  
隅田川大橋

隅田川大橋は、首都高速道路9号深川線の関連事業として建設され、1979年(昭和54年)10月に完成しました。

本橋は下層が一般道(都道)、上層が首都高速道路の2階建て構造の橋となっているほか、災害時の避難路としての役割を果たすため、歩道の幅員が約6mと他の橋に比べ広いことが特色となっています。

日本橋川の河口に架かる橋で、元禄年間からこの場所に架設されていたと伝えられています。現在の橋は関東大震災の復興事業により架け替えられた橋で、1927年(昭和2年)に架設されました。梯子を横にしたようなフィーレンデルと呼ばれる構造の橋で、日本で初めて現在でも非常に珍しい構造の橋です。

永井荷風の断腸亭日乗に「豊海橋鉄骨の間より斜に永代橋と佐賀町辺の燈下を見渡す景色、今宵は名月の光を得て白昼に見るよりも稍画趣あり。満々たる暮潮は月光をあびてきらきら輝き、橋下の石垣または繋がれたる運送船の舷を打つ水の音亦趣あり。」と記されています。

★12  
豊海橋



豊海橋

元禄年間に新大橋に次ぐ隅田川4番目の橋として架設されました。橋名の由来は5代将軍徳川綱吉にちなむといった説や、周辺の地名が「永代島」と呼ばれていたことなど諸説あります。

1897年(明治30年)道路橋として初の鉄橋に架け替えられ、関東大震災の復興事業により1926年(大正15年)現在の橋が架設されました。

当時は隅田川の最も河口に位置する橋であったため、「(略)河口を横断する巨姿は帝都水路の偉彩たるべきであるから、橋形に中央径間330呎(フィート)(=100.6m)を有する繫拱(タイドアーチ)を選び・・・」(帝都復興誌)とあり、国内で初めて支間長(橋脚・橋台などの間の距離)が100mを越える橋となりました。

2007年(平成19年)には都道府県の道路橋としては初めて、勝鬨橋、清洲橋とともに国の重要文化財に指定されています。

また、清洲橋と同じく、永代橋も歴史的にも貴重な橋であり、次の世代に継承するため長寿命化に取り組んでおり、その一環として、大規模地震に備えた補強を実施しています。

永代橋も国の重要文化財に指定されていることから、外観を変化させることなく補強を行っています。

永代橋の場合、川の中の橋脚の上にある橋げたのを載せるための「支承(ししょう)」と呼ばれる台座が、大規模地震の際、損傷する可能性があったため、大きな地震の揺れに対応できる新しい支承を追加しました。

### ★13 永代橋



元々の支承の内側にあるのが  
補強用の新しい支承です。(赤丸部分)



新しい支承の実物大模型  
を平成28年11月に開催し  
た「東京 橋と土木展」で展  
示しました。

大島川水門は、北十間川(墨田区)から南に分派する大横川の隅田川口にある水門で、1958年(昭和33年)に完成しました。高潮発生時には閉鎖して防潮堤の役目を果たします。東京都建設局では、このような水門を13基整備・管理し、高潮、洪水など自然災害から都民の生命と財産を守っています。

#### 【大島川水門諸元】

形式: 鋼製単葉ローラーゲート  
径間: 11m × 2連  
門扉高さ: 7.5m  
(平成28年度 耐震補強完了後 8.75m)  
竣工: 昭和33年度

### ★14 大島川水門



大島川水門(左)と相生橋(右)

★15  
中央大橋

佃島の北端、大川端の開発(リバーシティ21)に伴い1993年(平成5年)に架設された橋です。橋の顔ともいえる塔は、リバーシティ21地区に林立高層ビル群一体となって調和するよう、斜めの線を強調した逆V字形で、雄々しくそびえ立つその姿は、かつてこの地区が鎧島と呼ばれていたという古くから伝わる「鎧伝説」のカブトをイメージしたとされています。

上流側の橋脚上には、隅田川とセーヌ河の友好河川提携を記念してパリ市から寄贈された「メッセンジャー(使者)」のブロンズ像が設置されています。

★16  
霊岸島  
水位観測所

全国の「高さ」の基準となる水準原点は、測量法施行令第2条により東京都千代田区永田町1丁目1番地内にある日本水準点で、その高さは東京湾平均海面上24.4140mと定められています。この東京湾の平均海面を算出するための観測所がこの位置にありました。(現在は三浦半島の油壺観測所で計測)  
(国土交通省が管理しています。)



霊岸島水位観測所

★17  
南高橋

関東大震災の復興事業により1932年(昭和7年)に架けられた橋で、同じく関東大震災で被災し架け替えとなった、両国橋(1904年(明治37年)架設)のトラス橋を補強、橋幅を狭め架設したものです。

現在は中央区が管理し、中央区の区民有形文化財に登録されています。



南高橋

★18  
亀島川水門

日本橋川の下流で分派する亀島川の隅田川口に位置する水門で、1968年(昭和43年)に完成しました。

高潮発生時には閉鎖して防潮堤の役目を果たします。東京都建設局では、このような水門を13基整備・管理し、高潮、洪水など自然災害から都民の生命と財産を守っています。

【亀島川水門諸元】

形式: 鋼製単葉ローラーゲート

径間: 15m × 2連

門扉高さ: 8m

竣工: 昭和43年度



撮影ポイント② 亀島川水門

右の写真のように、★16霊岸島水位観測所付近のテラスから亀島川水門を撮影して下さい。



★19  
佃大橋

佃大橋の架橋位置付近には、江戸時代から続く佃の渡しがあり、戦後も都内唯一の公営渡船として活躍しましたが、1961年(昭和36年)に東京オリンピック開催に向けた関連事業として新しい橋の建設に着手。1964年(昭和39年)に完成しました。

隅田川に架かる橋としては戦後初となる橋で、当時最先端の構造であった鋼床版箱桁を採用し、かつ鋼製の基礎(ケーソン)や、大型のクレーン台船による橋けたの大ブロック架設を採用するなど、当時の最先端の橋梁技術を駆使して建設されました。

佃大橋東岸の上流側には佃島渡船場跡の記念碑があります。



佃島渡船場跡の記念碑

★20  
住吉水門

現在の佃大橋の月島側の取付道路(新月陸橋付近の道路)は、隅田川と朝潮運河を結ぶ佃川を埋め立てて作られました。

この時、残された佃支川の隅田川口に設けられたのが住吉水門で、1965年(昭和40年)に完成しました。

高潮発生時には閉鎖して防潮堤の役目を果たします。東京都建設局では、このような水門を13基整備・管理し、高潮、洪水など自然災害から都民の生命と財産を守っています。

【住吉水門諸元】

形式: 鋼製単葉ローラーゲート

径間: 4m × 1連

門扉高さ: 5.65m

竣工: 昭和40年度

(平成28年度 耐震補強完了)



石川島灯台(佃公園内に復元)と住吉水門

★21  
月島川水門

朝潮運河と隅田川を結ぶ月島川の隅田川口に設けられたのが月島川水門で、1964年(昭和39年)に完成しました。

高潮発生時には閉鎖して防潮堤の役目を果たし、高潮、洪水など自然災害から都民の生命と財産を守っています。

現在、月島川で分断している隅田川テラスを接続させるための「連絡橋」の工事を水門の前で行っています。

【月島川水門諸元】

形式: 鋼製単葉ローラーゲート

径間: 11m × 1連

門扉高さ: 8.6m

(平成28年度 耐震補強完了後 8.9m)

竣工: 昭和39年度



月島川水門

★22  
勝鬨橋

築地と月島を結ぶ渡船が、日露戦争の戦勝記念で「勝鬨の渡し」と呼ばれていたことが橋名の由来となっています。

1930年(昭和5年)の東京港修築計画に基づき計画され、1940年(昭和15年)に晴海で開催が予定されていた万国博覧会へのアクセスルートとなる予定でした。

大型船舶航行のため、中央部が大きく「ハ」の字に跳開するのが大きな特徴でしたが、交通量の増加と、大型船舶通航量の減少により、跳開は1970年(昭和45年)が最後となっています。

2007年(平成19年)には、都道府県の道路橋としては初めて、永代橋、清洲橋とともに国の重要文化財に指定され、2017年(平成29年)には跳開部の機械設備が機械遺産に認定されました。

勝鬨橋を開くために使用していた変電所を改修し、勝鬨橋に関する貴重な資料や関連情報等を展示・公開しています。

平成29年11月に新宿駅西口広場イベントコーナーで開催した「東京 橋と土木展」で展示し大人気だった、跳開時を再現した精巧な模型も展示しています。

資料館の前には「かちどきのわたし(渡し)」の記念碑があります。

【資料館 開館日時】

開館時間 9:30～16:30

(12/1～2/28は9:00～16:00)

開館日 毎週 火曜日、木曜日、金曜日、土曜日(入場無料)

※参加記念の「橋カード」「水門カード」配布は3/30(金)、31(土)、4/7(土)のみです。

★23  
かちどき  
橋の資料館



勝鬨橋の模型

ボタンを押すと解説とともに、橋が開き船が通過します。